



TITLE:

# 農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化

AUTHOR(S):

八木, 芳之助

---

CITATION:

八木, 芳之助. 農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化. 經濟論叢  
1934, 38(1): 83-106

ISSUE DATE:

1934-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130405>

RIGHT:

山本博士  
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

# 經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉  
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

## 目次

尙書の虞夏書に見はれたる經濟思想	法學博士 田島 錦治 一
酒の專賣に就きて	法學博士 神戸 正雄 二四
マールクスの認識論原理	文學博士 米田庄太郎 四二
植民の世界史的意義	文學博士 高田 保馬 四六
農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化	經濟學士 八木芳之助 八三
我國工業に於ける小企業の殘存に關する一研究	經濟學士 大塚 一朗 一七〇
資本蓄積率の差異と固定資本	經濟學士 柴田 敬 一八五
中央銀行兌換準備檢討	經濟學士 松岡 孝兒 一八〇
貨幣需要と貨幣の流通速度	經濟學士 中谷 實 一八六
植民地時代米國の土地保有制度	經濟學士 堀江 保藏 一九九
米國の對玖馬投資とその影響	經濟學士 長田 三郎 二七〇

免稅點以下の小額所得者

經營學の基礎概念たる資本、企業及經營

世界科學に就て

漁村更生策に於ける問題

人口粗密の原因觀

徳川時代における植民的思想

ハーゲル市民社會論と經濟學

恐慌と蓄積と植民

北海道鯨漁業に現存の漁場貸借關係

我國に於ける植民政策學の發達

クレルツキアに就いて

山本美越乃博士年譜及著書論文目錄

經濟學博士 汐見 三郎 二四

經濟學博士 小島昌太郎 二六〇

經濟學博士 作田 莊一 二七六

經濟學士 蜷川 虎三 二九五

法學博士 財部 靜治 二九五

經濟學博士 本庄榮治郎 三九

經濟學博士 石川 興二 二四九

經濟學博士 谷口 吉彦 二六九

經濟學士 岡本 清造 二九四

經濟學士 金持 一郎 四二七

農 學 士 若 木 禮 四四〇

經濟學士 高木 眞助 四七七

# 農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化

八木 芳之助

## 一 緒 言

今日の農家に於ては、往時の自給自足經濟が破れて、貨幣經濟化され、それに伴ひ農家經濟に於ては商品生産が重要な役割を演ずるに至つた。この農家經濟の商品化を促す要因は、(一)農業からの加工業の分離である。農家はその原始的形態に於ては各種の加工の業務を包攝し、謂はゞ農家一單位の中に社會の全生産過程が盛られてゐた。然るに工業の發達に伴ひ、有利なる加工の業務は漸次獨立の機械工業となつて農家の手を離れ、安價にして便利なる工業品として農村に供給されることとなり、農家をして此等の工業品の購入を不可避的ならしめ、その結果、之が購入に必要な貨幣を獲得するため、生産物を商品化すべく餘儀なくさるに至つた。(二)次に租税制度の改正により、公租、公課が物納から貨幣納に改められ、また專賣制度の施行、消費稅政策等により、從來農家に於て自給し來りし煙草や酒に就ても、之を購入すべく餘儀なくされ、それによする貨幣を獲得するため、生産物の商品化を強ひらるに至つた。(三)更に農業生産上に於ける技術の進歩、金肥の増加、優良種苗、農具及び農業機械の購入、土地改良及び耕地整理等のため

に貨幣支出を多く要することとなり、このための貨幣獲得は農家の商品生産化に更に拍車を加ふるに至つた。

かくの如く今日の農家に於ては商品生産が重要な地位を占むるといふも、我國の如き小農經濟に於ては、尙ほ農家の生活資料の一部分は之を自給しつつある。されば小農經營に於ては、その窮極の目的は生活の維持乃至は充實であり、貨幣獲得はこの窮極目的を達する一手段であるとも言へる。併し上述の諸事情により農家が既に交換經濟の領域に入込み、往時の自給自足經濟に復歸せざる限り、自家生産物の商品化によりて貨幣を獲得することは、農家の生活維持並に充實のために極めて肝要である。されば農家が商品生産化する場合に於ては、小農と雖も商品生産によりてなるべく多くの貨幣を獲得する必要に迫られ、生産の有利性に立脚して、最も有利なる生産物の生産に向ふべき傾向を促すは當然である。この事は本邦農産物の作付段別の變遷に就て見ても、不利なる作物より漸次有利なる作物へと推移することによりても立證される<sup>1)</sup>。しかも各作物の有利性は夫々の價格關係を通じて決定せらるるものにして、農業の如き有機的生產に於ては各作物の有利性は各地方に於ける地質及び氣候等の自然的條件によりて左右される所大なると共に、農産物に對する需要の變遷、交通機關の發達、經濟組織の變化等によりて制約される。かくて有利なる生産物への轉化の可能性は、農業を次第に専門化する。之を立地學の見地よりすれば、最も優れたる立地條件を備ふる所に特定の生産が榮ゆる。しかもこの推移は一國內に於ても或は

1) 拙著、米價及び米價統制問題、三五頁以下參照



國際間に於ても看取され得る。かくの如く各種の農産物を並列的に對比せしめ、地域的に分化するを水平的分化と呼ぶ<sup>1)</sup>。例へば或る地方が専ら穀作を中心とするに反し、他地方に於ては園藝、果樹又は畜産に主力を集中するが如き之である。今後の本邦農業政策竝に目下行はれつゝある農村更生計畫が、從來に於けるが如き各府縣單位のマーカンチズムによつて禍されることなく、日本全體の農業生産力の増進と云ふ意識の下に、適地に適生産を移すことによつて、全面的合理化を遂行するに在りとするならば、この農業生産の水平的分化が何故に起り、また如何なる發展傾向を取りつゝあるかに就て深く留意せなければならぬ。

次に農業生産に於ては、上述の水平的分化と並び、一つの最終生産物に至る生産階段が夫々獨立したる經營によりて行はれるといふ方向への分化が現はれる。これを垂直的分化と呼ぶ。嘗て農業が包攝せる加工業的業務が獨立せる工業となれるは、この分化の一表現である。例へば生絲に關しては、その生産が桑葉栽培、養蠶、製絲、販賣と分化され、各獨立したる經營主體によりて行はれるが如き之である。工業生産に於てはこの分化は全體として甚だしく發達してゐるが、資本主義が獨占段階に達すると、反つて生産過程の綜合への傾向が現はれる。蓋しこの垂直的分化は一商品生産の各段階を獨立企業化し、原料生産と最終財生産との間に幾多の中間生産者を挿入し、それに要する經費増加により、最終財生産資本の利潤を少なからしめるからである。従て資本が巨大となり、それが使用する原料生産物が莫大となる場合には、同一資本による垂直的分

1) 那須皓氏、東畑精一氏共著、協同組合と農業問題、三七四頁參照  
2) 大槻正男氏、農村經濟更生運動の經濟的意義(農業經濟研究第九卷、四號)、二四頁參照  
東畑精一氏、農業に於ける自由競争と其の制限(經濟學論集第三卷、七號) 六三頁參照

化の統一が企圖され、原料生産から最終財生産に至るまでの全生産は、技術的には極度に分化されながら、各生産過程の生産物は商品として外部に現はれず、資本内部の原料として使用され、最終生産物のみが商品として市場に現れるに至る。近時農業に於ても、この生産の垂直諸階段を産業組合によりて綜合統一せんと試みられてゐる。酪農組合、製絲組合の如き其の一例である。併し農業原料加工業には資本支配が強大であるから、原料生産者たる農民の産業組合の手によりて、加工業を農民の手に復活統一し得るや否や疑はしい。目下農村問題解決の一方策として、農村への工業移植が叫ばれてゐるが、その可能性如何について考ふる場合に於ても、工業は之を加工原料の點よりすれば、國內農業原料の加工業と然らざる工業とに分たれる。茲では單に前者に就てのみ問題とするが、この場合に於ても、この加工業の農業よりの分離、即ち農業生産上の垂直的分化が如何なる程度に行はれて居るか、如何なる發展傾向をとりつゝあるか、またそれが固有の農業と農民とに對し如何なる影響を及ぼしつゝあるかに就て研究するは、農村工業化問題の解決上、極めて有意義でなければならぬ。

## 二 農業生産の水平的分化

上述の如く商品生産は農業生産をより、有利なる生産へと向はしめ、その結果として氣候、地質等の自然條件、竝に市場關係、勞力關係等の經濟的條件の最も適せる地域に特定の生産が集中し

1) 東浦庄治氏、小農の商品生産化と資本の小農支配（帝國農會報、第二一卷、七號）七頁

農業經營組織を單純化する傾向をとる。蓋しこの單純化によりて商品生産化に能率よき專業が現出するからである。その結果は農家經濟の交換經濟化をより大ならしめ、かくて交換經濟化と商品生産化とは互に因となり果となつて發展する。素より農業に於ては、かゝる生産の單一化傾向を妨げ、再び經營の多面化を強要する強い自然的竝に經濟的條件の存することは後に論ずる如くである。

かゝる農業生産の水平的分化の研究は、古くはテウネンにより、近くはブリンクマンによりて試みられてゐるが、この研究に於ては一般に二つの前提、即ち一方に於ては國民經濟の靜的狀態の假定から出發して、所與の發展段階に於ける各種の生産方向の場所的竝列關係を説明する法則が研究され、他方に於て時間的に條件づけられたる生産方向の變化を説明するため、生動する經濟體に就て研究される。第一の研究に於ては、各種の經營方式が形成せられる場合に作用する諸力たる立地諸要因が究明され、第二の研究によりては、發展の經過中に立地諸要因の力の比率に起る變化が闡明される。<sup>2)</sup> かく兩者を分離して研究するは研究上の便宜に出づるものであるから、吾々はテウネンの如く、立地諸段階が時の經過と共に受ける立地變革を、本質に於て或る任意の發展段階に於ける經濟地帶變化の映像と觀て、孤立國は畑作に關しては同一國が數世紀の間に呈示する姿を一時に表示すると言ふを得ない。かくの如く主張することは、經濟の發展進歩は、その影響を單に市場を起點とする配置力を強くするといふ點にのみ及ぼし、立地諸要因の力の比率に

- 1) von Thünen, Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie, 1842—1850. Brinkmann, Die Oekonomie des landwirtschaftlichen Betriebes (in Grundriss der Sozialökonomik) 1922.
- 2) Brinkmann, a. a. O. S. 75.

影響を及ぼさないといふ狭い假定の枠内に於てのみ妥當するに過ぎない。然るに現實に於ては時の経過と共に生産の配置に關與する諸力並に之等の個別構成分子の間に漸次變位が起り、從て諸力は常に同一均衡状態にあるとは限らない。かくて場所的立地變化と時間的立地變化との間の平行性が消滅するか、又は少なくとも其の一部分が破壊されるからである。<sup>1)</sup> かくる兩者の平行性を破る主なる要因としては、一般國民生活程度の向上に伴ふ各農產物に對する需要比率の推移、工業技術の發達に伴ふて起る農業よりの動植物原料栽培の驅逐等が考へられる。

かくて價格の變動に隨伴して生起する各農產物立地の推移に就ては、ある農產物の價格が相對的に騰貴すればする程、その作物は土地獲得競争に於て有利となる。而して此の作物の變更に際しては、各作物の収益性が比較される。併し我國に於ける如く、主として自家勞働力に依存する小農經營に於ては、資本家的大經營に於けるが如く、極めて正確なる生産費計算を基礎とする各作物の収益率の比較によるよりも、寧ろ實際には次の如き簡單なる収益性の比較によつて行はれる。即ち生産費中に於ても、(1)小作料は大體に於て慣習的に固定し、小作人の栽培作物の交替によりて變化されないものであるから、その限り小作料は此の収益比較の中に入込まない。(2)次に新舊兩作物の生産に要する流動資本(肥料出費の如し)の額が問題となる。今之を $F_c$ とす。(3)更に固定資本に就ては、(イ)新舊兩作物に共通して利用され得る耕作用の犁鋤の如きものは、この収益比較中に入込まない。(ロ)特定の作物に固定し、之を廢すれば完全に無用となるものの價額<sup>(註)</sup>と新作物の栽

1) Brinkmann, a. a. O. S. 113.

註) 但し其の作物が全く收支償はずして新作物に移る場合には、この償却額を零として無視することが出来る。

培に特に必要となる固定資本設備の償却費とが問題となる。この兩者を加へたる總額を $U$ とす。この總額が大なれば大なる程、舊作物より新作物への交替が妨げられる。(4)最後に勞賃は自家勞働の場合には直接的なる貨幣支出となつて現れないから、收益比較中には加らない。たゞ雇傭勞賃のみが問題となる。之を $W$ とす。從て自作農に於ても小作農に於ても、 $租收入 - (Fc + C + W)$ の餘剩がより大なる作物へと推移する。之を一言にして云へば、各作物の粗收入より、その生産に必要な貨幣支出を差引きたる殘額、即ち自家勞働力に對する報酬の大小比較によるものである。

併し本邦農家の自家勞働力は常に可能的なる最高限度にまで利用し盡される場合が少なく、多くはその一部分は個々の農家に於て退藏され、豫備的勞働力を形成する。從て一度新しき儲になる作物が出現せんか、全國を舉げて農家の豫備軍が動員され、その作物栽培へと殺到し、資本家的採算よりすれば豫期することを得ざる範圍にまで、農産物の作付交替が行はれることとなりて過剰生産を惹起し、豫想外の價格暴落を來すことがある。

以下我國農業生産の實狀に照し、如何なる水平的分化を呈してゐるか、またこの分化が如何なる方向を辿りつゝあるかに就て吟味するであらう。

先づ第一にチウネンの試みたる靜的狀態の下に於ける農業生産の水平的分化に就て考ふるに、我國の農業は既に世界經濟に聯關せるを以て、植民地は云ふ迄もなく、外國の農産物競争の影響

を被り、また内國的にも多數の都市市場の竝存と交通機關の發達とによりて、その農業に及ぼす影響は互に相交錯するを以て、チウネンの假定せる孤立國に於ける如く、經營の分布は明瞭に現れるものではない。併しこの分布を促す要因は、主として交通地位、土地の自然的性狀又は特殊生産力によるものなることは、之を否定するを得ない。今試に東京市に其の例をとるならば、その近郊（東北部）に於ける農業經營分布は次の如き姿を呈してゐる。

地帯別	日本橋より の距離	都市地域及び農業地域	農業組織						
			搾乳	温室	養鶏戸數 に對する 五十羽以 上飼養戸 數割合	觀賞 植物	穀菽	蔬菜	桑園
都市東京市	一里半	高度に發達せる商工業地域							
第一帶	一里半より二里	工業地域、搾乳の地域	一、三六頭	三三坪	三・三%	草本花 卉鉢物			
第二帶	二・三里	園作、搾乳、温室、水田、 工業の地域	五五六	二、〇九三	〇・〇九	同	二九・二%	七〇・八%	
第三帶	三・四里	園作、稻作の地域	一〇	二九	〇・二〇		五四・二	四五・八	
第四帶	四・五里	同		三二〇			六三・一	三七・〇	
第五帶	五・八里	稻作、畑作の地域					六四・七	三五・三	
第六帶	八・一二里	稻作、畑作、桑園の地域					八八・四	一〇・九	〇・七%
第七帶	一二・一五里	同					七七・〇	九・七	一三・三
第八帶	一五・一八里	同					六七・五	五・四	三七・一
第九帶	一八・二〇里	桑園の地域、一部稻作					四六・八	九・八	四三・四

1) 青鹿四郎氏、農業經營合理化的地理的一考察(帝國農會報、第二〇卷、六號)  
四三頁による

かくの如く都市近郊に於ては、輸送費に多額を要し、しかも日常生活の必需品乃至は都市文化生活上に必要な觀賞用植物、又は新鮮なる高級蔬菜の栽培が主として行はれ、之等の作物は規則正しい運賃限界によりて、一定の栽培地帯を形成する。大都市近郊は所謂住宅郊外をなすものにして、その間に搾乳、家禽、温室、觀賞植物、圃作等の都市經營が介在し、此等は所謂メトロポリス農業として特殊經營型を呈し、その外側を圍んで穀作を主とする本邦一般の農村に見ると同様な農業型が現れてゐる。

都市近郊を廻る農業組織の各地帯は、都市の膨脹に伴ふ特殊農産物に對する需要増加と道路竝に運搬具の改善とに基き、漸次都市より擴大する。即ち明治初年迄の人情、馬背によりしものが漸次に手車、馬車、牛車、更にトラックへ移ることによりて、相對的に運賃を低下し、その出荷範圍は手車による場合は都心より三里以内のものが、牛、馬車による場合には都市より五里以内となり、更にトラックによる場合には都心より十里以内へと擴大するに至りたるが如きである。

かくの如く交通機關の發達に伴ひ、一方に於ては都市近郊の果實蔬菜栽培地域の擴大を促すと共に、他方に於ては遠距離輸送蔬菜產地展開の新傾向を齎す。この新傾向を促す要因は、第一に輸送機關竝に輸送設備の發達である。果實、蔬菜類の如き腐敗性の大きなものは、從來都市消費地の附近に於てのみ栽培されたるが、輸送設備の完成により遠距離品も都市近郊品と差異なき品

質を保ち得るに至り、遠距離地も都市近郊と對抗し得ることとなる。第二に都市近郊は都心よりの距離が近い<sup>1)</sup>ため、蔬菜栽培上優位を占むるが、近郊は土質、氣候の點よりして、必ずしも優位を占むるものとは限らない。従てこの自然的條件に就て優れたる遠隔地は、その生産品の新鮮度には幾分缺くるところあるも、品質の優良と生産費の低安とに俟つて、交通機關の設備完成に伴ひ、近郊品に對抗し得るに至る。第三に都市の膨脹に伴ひ、近郊蔬菜生産地は都心への距離が遠ざかるに従つて、益々近郊たる優位を失ひ、都市中央部に對しては、比較的遠距離地が近郊に對抗し得るに至る<sup>1)</sup>。第四に遠距離地に於ける栽培技術の進歩並に共同出荷組合の發達、都市中央卸賣市場の設立等は、この勢を更に助成する。而してこの遠距離地の進出中には、所謂新產地として、最近新に蔬菜、果實の栽培に進出したる地方と從來からの特產地として、以前は其の地方都市の消費のみを充せるものが、新に關東、關西の大都市に進出せるものとの兩地方がある。その何れにしても交通機關、貯藏設備、出荷組合が發達すればする程、各產地に於ける氣候、地質、地勢等の如き自然條件の優劣が農業の水平的分化を促す一層重要な要因となり、各地域間に作物栽培の交替が一層容易に行はれるやう促し、従て各作物の產地移動が行はれ、結局適地適作物化する傾向が顯著となる。昭和五年の農業恐慌に際し、蔬菜が最も早く價格低落を示したるは、かくの如き交通機關の發達やトラックの普通によつて、蔬菜の供給區域が急激に擴大し、自然的條件の優位なる地域が供給可能の圏内に入り、供給過剩を來したからである。かくて都市近郊の

1) 勝賀瀬實氏、大都市向蔬菜供給地將來の展開方向(農業經濟の諸問題)三五四頁



蔬菜栽培上に於ける古い獨占が次第に失はれるに至つた。

例へば蔬菜類に就ては、神奈川、静岡、愛知が都市近郊の競争者として現れ、次で四國南部、九州東南部、紀州南部、小笠原、琉球、臺灣等所謂南國蔬菜の進出を見るに至り、柑橘類に就ては和歌山、大阪、静岡の舊産地に對し、廣島、愛媛が進出し、その栽培中心は次第に西漸南進し、西瓜に就ては愛知、奈良の進出が顯著であり、枇杷に就ては千葉、兵庫、愛媛、長崎、鹿児島、進出を見るに至り、葡萄に就ては舊産地の山梨が大阪に凌駕され、更に作付面積に於ては岡山、廣島が大阪に迫れるが如き、桃に於ける神奈川、岡山、廣島の進出、櫻桃及び苹果に於ける青森、北海道の進出、日本梨に就ける静岡、廿世紀梨に於ける鳥取、岡山の進出、仙臺白菜の進出、茶に就ては京都の舊産地に對する静岡の進出、桑に就ては福島、群馬、長野の如き特定地方より全國への普及、米に就ては特に北海道、東北、北陸、九州、臺灣、朝鮮に於ける作付面積の増加の如きその主なるものとなす。

かくの如く都市の膨脹と交通機關の發達に伴ふ遠距離産地の進出は、更に都市附近に於ける蔬菜經營方法と其の栽培作物種類の變更を促した。即ち遠隔地よりの蔬菜の進出により、都市近郊の油紙障子又は硝子障子の温床式による蔬菜の促成栽培が純粹の温室經營となりたるが如き之である。最近はこの温室經營も南國蔬菜の進出によつて打撃を蒙るに至つた。それは輸送機關の發達完備により、南國地帯の蔬菜が、温室蔬菜栽培者の多大の期待をもつ露地栽培蔬菜の端境期に大量に出荷されるに至つたのである。かくて都市近郊の温室經營者は、之に對抗するため、南國より汽車輸送、汽船輸送をなし得ざる破損大にして、貯藏性少き早取胡瓜、トマト、カーネーション、バラ、スカーレットピー等に移作するか、或は南國露地物の追従を許さぬ品質の卓越せる高級メロンの如きものを本位蔬菜として栽培することとなり、しかも其の出荷は南國蔬菜

の出荷期と衝突せないやう工夫を凝すこととなり、茲にも栽培作物の種類が轉換されてゐる。<sup>1)</sup>併しこの裏面には、好景氣時代に著しく増加した高級温室蔬菜の需要が、不景氣時代に入りても減少せざるのみか、一般的嗜好の向上、味覺の進化、ヴィタミン説等によりて却つて増加し、その需要が一般大衆化されたるが如き需要側の事情も之を看過するを得ない。

かくて交通機關の發達は市場への供給區域を漸次擴大するが、これにも生産物の腐敗性の點より、また運賃の點よりして一定の限界がある。従て適地適生産と云ふものの、市場より餘り遠隔せる地方は、勢ひ生産物を加工して、市場に供給せざるを得ざることとなる。例へば牛乳に加工してバター、チーズとし、生果又は蔬菜を罐詰として供給するは、その腐敗性の點より起る加工にして、馬鈴薯に加工して酒精とし、また甘蔗に加工して砂糖とするは、粗生産物から重い物料を除去して、輸送力を高めるためである。従て後者の場合に於ては、加工による輸送能力増加系数が大なれば大なる程、生産地に於て加工するのが、それだけ有利となる。この生産地に於ける原料加工費用は、一方に於て經營規模の擴大するに伴つて減少するが、他方經營規模の擴大に伴ひ、より遠距離より原料を蒐集せざるを得ないこととなり、従て運送費が遞増することとなる。故に農産物の加工は、それが農家の産業組合によりて經營されるにしても、その合理的なる經營規模は、加工費用と原料運搬費との總額が最小なる點に見出され、従て原料加工組合設立の合理的立地も自ら之によつて決定されることとなる。<sup>2)</sup>かくて一般的には交通地位が良い程、農業生産

1) 久保佐土美氏、商品としての蔬菜栽培の發達過程（農業經濟研究、第九卷、四號）八六頁

2) Vgl. Tschajanow, Die volkswirtschaftliche Bedeutung der landw. Genossenschaften (in Weltwirtschaftliches Archiv, Okt. 1926,) S. 275 ff.

物は低度の加工度に於て市場に搬入せられ、逆に交通地位が良くない程、農業は取得せる農産物の運搬性を加工によつて高めるやうに努力する。北海道、東北地方に於ける牛乳加工業の發達はこの一例である。

この場合農産物の加工に就ては、單に國內市場のみを考察したるに留るが、今日の國際經濟の下に在りては、外國競爭品の影響は之を無視するを得ない。例へば大都市の遠隔地と雖も、牛乳に加工することによりて、之を都市市場に供給し得ることとなるも、これと同時に乳製品としては世界市場商品となるから、外國競爭品の價格競争に曝され、外國品が安價なる程、國內の牛乳加工經營の地理的分布は、都市市場より、それだけ擴大するを得ないこととなる。

以上は交通機關の發達に伴ふて、各農産物が各地の自然的事情に適應し、適地適作化する傾向に就て論じたるが、産業技術の發達も同様に農業生産の水平的分化に著しい影響を及ぼす。この産業技術の發達に就ては一般工業技術の發達と特殊農業技術の發達とが考へられる。この一般工業技術の發達は、無機的生産物による有機的生産物の排除となりて現はれる。藍、樟腦、絹絲、ゴム、バター等に就ては、既に強力なる工業生産の代用品が現れてゐる。嘗て榮えたる吉野川沿岸の藍作が獨逸人造藍に壓倒されて全く衰滅し、吉野川下流地方は農業組織が多角化し、中流地方は養蠶に集中し、嘗ての藍畑は桑園と化したるは、その顯著なる一例であり、又全國の菜種栽培が電燈の普及に伴ふて衰退しつつあるが如く、工業技術の發達は特殊農産物の衰退を促し、ひ

いて農業生産上に於ける水平的分化に顯著なる影響を及ぼしてゐる。

次に農業技術自體の發達も、農業生産の水平的分化を促す。例へば米價の昂騰期に於て、内地の米作品種の改良が普及すると共に、北海道に於ける米作の限界が北進し、また臺灣、朝鮮の米作が内地米の有力なる競争者となりたるが如き之であり、又上述の南國蔬菜の進出は、一面交通機關の發達完備にもよるが、また他面には蔬菜栽培の技術の普及にもよるものである。更に農産物供給上の統制、即ち共同荷造、共同検査、共同出荷、共同計算等もまたこの勢を助成する。一縣を單位とする供給上の統制に就ては、宮崎縣の南瓜、宮城縣の白菜、徳島縣の筍、静岡、愛知兩縣下の溫室園藝品等に於て、既に顯著なる成績を收めてゐる。かゝる出荷統制は自然及び交通條件の優位と相俟つて、互に因となり果となつて農業生産上の水平的分化を促して行く。

かくの如く農産物の商品化に伴ひ、農業生産は次第に適地適作化され、經營は複合的より單一的となる傾向をとる。蓋しこの單一化の方が商品生産的に能率よき專業を出現するからである。併しながら農業の如き有機的生産に於て、殊に家族的なる我國の小農經營に於ては、(一)自家勞働力利用の季節的均衡、(二)作物交替による土地生産力の維持、(三)家畜飼養挿入による自給肥料の獲得、(四)米作、蔬菜栽培、養蠶、養畜等の混合經營による各農産物の價格下落に對する危險分散等の考慮よりして、多面經營への強要の存することは之を看過するを得ない。

かくて農家の商品生産に伴ひ、適地適生産が行はれ、農業生産の水平的分化を促し、經營を單

一化せしむるが、他方に於て農業經營の多面化を強要する諸條件の存在によりて、農業經營の極端なる單一化が行はれ得ないこととなる。この事は、我國の水田に於ては稻作以外に有利なる作物の存せざることと、我國の隣保諸國が我國よりも遙に未發達の農業國にして、之に對しては高級なる園藝農産物を輸出する餘地少なき特殊事情によりても一層強められる。されば今後の我國農業は米麥作を主業として全國的に行はれ、之に加味すべき養蠶、園藝、養畜等の副的農業部面に於て主として適地適生産を促す傾向を採るであらう。

### 三 農業生産の垂直的分化

以上に互りて論及したる水平的分化と並び、農業生産に於ては、垂直的分化、即ち最終生産物に至る生産階段の各々が夫々獨立したる經營體で行はれる傾向をとる。この傾向は資本主義的工業の發達に伴ひ自家用のために生産する農民的工業の解消に始まる。紡績、製絲、製粉、醸造、酪農、製糖の各方面に於ては、農産物の加工業が夙に固有の農業から分離して、獨立の工業となつてゐる。かくの如き農業生産上に於ける垂直的分化の結果として、農業生産物を原料とする製造業者と原料生産農家との關係が、原料加工業發達の各段階に應じ、種々異なる形態をとるに至る。

農業的原料の加工が小資本によりて手工業的に行はれる、加工業發達の幼稚なる段階に在りて

は、原料生産農家と原料加工業者との間に、大商業資本が介在し、兩者の仲介を引受けるものであるから、原料生産農家は、大商業資本の末梢たる地方仲買人と接渉し、散在せる原料生産農民の大群は、この地方仲買人を通じて大商業資本の勢力下に立つ。次で小加工業者が相當の資本力を有するに至ると、此等の加工業者が地方仲買人と相並んで直接農家へ原料の買出に廻ることとなる。併しこの場合に於ける農家と原料加工業者との直接取引は、單なる商業資本としての取引の特殊形態をとるに過ぎない。更に資本主義の發達に伴ふ大工場制加工業の發達により、漸次弱小なる加工業が壓倒されるに及び、從來の大商業資本による工業支配が轉化して、大工業と大商業との競争又は兩者の結合を促す。かくて産業資本の擴大に従ひ、大工業は一面に於ては生産原料の大量取引を要求し、他面に於て原料品質の統一を要求するに至り、その結果、遂に原料生産農業者が直接中央の大資本と結合することとなり、原料生産者の共同出荷を促し、中間商人の介在が批判される時代が起る。

かくて資本主義が獨占資本主義時代に達すると、原料獲得に關しては、原料生産者を直接自己の支配下に置かんとする手段を講ずるに至り、一方に於ては原料生産の豫約を行ふと共に、他方に於ては原料の品質統一を圖るために、工業資本家は農民の原料生産技術を左右し、種子、肥料を分配し、作付順序を決定し、原料生産者を自己の加工經營計畫の純然たる機械的な執行者たらしめ、農業經營の内部組織にも勢力を及ぼすに至る。<sup>1)</sup> また時としては加工業資本は原料生産を條

1) 東浦庄治氏、小農の商品化と資本の農業支配(帝國農會報、二一卷、一一號)

一七頁  
2) Tschajanow, a. a. O. S. 277.

件として、農民に土地を貸付け、農民を直接工業に従屬せしめ、全く工業労働者化する場合さへ現はれるに至る。

以下本邦農業生産に於て起りつゝある斯る垂直的分化に就て考察する。

一、かゝる農業生産に於ける垂直的分化は原料生産の場合に最も顯著に現はれるが、食料生産に於てもまた現れる。例へば本邦内地の農家に於ては、生産米は之を玄米として賣却するが、朝鮮の農家に於ては打穀過程を経ざる粃の儘にて賣却するを普通とする。されば朝鮮に於ては一の特種加工業たる粃擢業の存在を必要ならしめ、稍もすれば粃と玄米との間の價格關係を中斷せしめる<sup>1)</sup>。かく朝鮮農業に於ては内地農業に比して、打穀といふ加工過程が農業から分離してゐる關係上、それだけ農民の農業収益は少くなり、商業資本の支配を蒙らざるを得ない。而して打穀、精白は比較的小規模の設備によりて行はれ得るから、この加工部面に於ける獨占性は薄弱であり従て粃買集めには比較的自由競争が行はれるから、加工業に對する農民の從屬は左程強大ではない。

二、同様なる關係は牛乳生産農家と其の加工會社との間にも窺はれる。元來牛乳は貯藏力に乏しく、それは時間的に見て一日を出です、加ふるに物理的にも運搬が困難であるから、その運搬距離は經濟的に見て數里を出でない。従て牛乳供給上、各地方間の競争が行はれ難く、比較的獨占力を維持し易い。殊に小都市に於ては牛乳生産者の數も少なく、従て協定により牛乳の配給及び

1) 拙著、米價及び米價統制問題、四二二頁

生産を統制し易き關係上、獨占的地位を維持し易い。東京、大阪の如き大都市に於ける牛乳價格が、地方小都市の牛乳價格に比し低廉なるは、この事情に基くものである。然るに牛乳が一度加工され、乳製品となるや、輸送上の困難は著しく除かれるが、それと同時に生産地附近の都市に對する供給上の獨占性を失ひ、世界市場よりの外國競争に曝される。從て乳製品の原料としての牛乳は、その獨占性を失ふに至るが、その獨占性は、ある場合には加工部面に移ることがある。即ちバター、チーズの如き乳製品は、比較的小資本の設備を以て加工されるから、資本獨占が薄弱なるに反し、ドライ・ミルク、コンデンス・ミルクの如き乳製品の製造には、大規模の經營組織と大資本とを必要とするを以て、容易に獨占的地位を獲得し易い。併しこの獨占的地位は、外國品の競争に曝される乳製品の市場に於てでなく、寧ろ原料たる生乳の生産者に對してである。而してこの獨占は、短時間に近距離の工場に原料として牛乳を販賣せざるを得ない生産者の立場から起るものである。この加工會社への生乳の販賣は一般に豫約販賣たる納乳の形式をとる。然るに生乳加工會社の乳製品は、關稅の障壁を通じて、濠洲、北米、南米等の牛乳生産上に於て有利なる生産條件を有する諸外國の乳製品と競争的立場に立つ。併し加工會社は原料生乳の獲得に獨占的地位を有するを以て、外國競争の打撃を防ぐには、加工費及び利潤の低下に努めるよりは、寧ろ第一に原料購入價格の引下を圖るは當然の道行である。かくて牛乳加工業が農家經營より分離し、然かも大資本の下に經營される場合に於ては、農民は自から大資本の支配に服することと



なる。現にコンデンス・ミルクの原料としての牛乳の生産地たる静岡縣三島地方に於ては、牛乳の價格が他地方に比してより、低廉であるのは、這般の事情を反映するものである。

三、生絲に就ても桑葉栽培、養蠶、蠶種製造、製絲と分化すると各階段の利害は必ずしも一致せず、最終階段のものが他に其の負擔を轉嫁するに至り易く、殊に近時の様に、製絲業者と蠶種製造業者とが合體すると、右の事情が更に鋭くなつて養蠶業者と對立するに至る。桑葉栽培と養蠶との分化は、地方により多少は行はれてゐるが、元來養蠶そのものは、通例自家栽培の桑葉を以て農家が小規模で行ふものであり、桑葉自體も繭生産上の原料としては、長時間の運送に堪へないものであり、從て遠距離より蒐集するは困難であるから、養蠶は資本家的工場生産によりて行はれ難い。たゞ養蠶農家に於ける收葉量と繭立枚數との均衡がとれない場合に限り、桑葉取引が行はれ、地方によりて桑葉周旋人さへある處もあるが、それも多くの場合一村落内の桑葉の需給を調節する程度に過ぎないから、この兩者の分化からは、今日のところ大なる問題は起る餘地がない。

次に養蠶農家に於て座繰製絲として副業的に營まれてゐた製絲が分化して、獨立な機械製絲に發達すると、當初は製絲家の原料獲得は養蠶の自宅販賣、繭市場販賣、問屋等の自由市場を通じて行はれて來たが、蠶絲業が大資本化すると繭確保の必要上、特約取引の名を以て呼ばれる供給契約による繭取引が発生し、所謂特約養蠶組合の成立によりて、養蠶農民は次第にその獨立性を

失ふて行く。那是、片倉等の大製絲會社が特に特約供繭組合を必要とするは、之によりて各種段階の繭取引費用を節約すると共に、繭の品質統一を圖り、以て製絲過程上に於ける生産能率を發揮し、且つ生産生絲の品質統一を圖るためである。この目的のため製絲會社は特約組合に對し、一定の蠶種を配布し、養蠶教師を派遣し飼養法の指導を行ひ、其他資金融通、肥料、蠶具、桑苗等の前貸を行ふ。而してその産繭は必ず自己の工場へ提供せしめる<sup>1)</sup>。而してこの産繭の購入に際しては、通常製絲家は所謂掛目取引を行ふのであるから、絲價變動が直ちに買上繭價に反影し、從て生絲低落の場合には、製絲家の損失が稍もすれば養蠶家に轉嫁される虞がある。更に其の配布する蠶種に就ても、絲質本位で、飼育困難にして强健性に缺くものが少くないから、養蠶農家が損害を被る場合が多い。かくて養蠶農家は實質的には製絲工場の原料部門に働く出來高拂賃労働者となる。

尙ほ同様なる關係は、ビール釀造工業と原料麥生産者との間の供給契約にも見られる。

四、農業から加工業の分離によりて起る原料生産者たる農民の原料加工資本への從屬關係の顯著なる例は、之を臺灣に於ける製糖會社と甘蔗栽培者たる農民との間に見る。製糖會社が加工原料たる甘蔗の確保に大なる關心を有つは、生絲生産に於ける繭の如く、原料甘蔗費用が全砂糖生産費の主要部分を占むるからである。製糖會社が製糖用甘蔗を獲得する型態は、(一)會社自ら土地所有權を得てその土地を自營するか、或は小作に附するかによりて原料を確保する方法、(二)會

1) 千坂高興氏、特約製絲組合と其の將來(農業經濟研究、第七卷、三號)一〇四頁。近藤康男氏、蠶糸業統制論、一〇八頁

社が土地を他から賃借し、自營又は轉貸方法によりて原料を取得する方法、(三)原料買收獲得方法として、採受區域蔗作規程に基き一般蔗農から原料を買收する方法これである。<sup>1)</sup>この三型態中、原料買收獲得方法が最も廣く行はれ、この方法による蔗園は全蔗園の約七割を占めてゐる。前二者の方法にありては、會社が勞働者を雇傭して甘蔗を自作するか又は甘蔗栽培に従事する義務を契約の主たる内容として小作せしめるかの何れかである。この點に就ては瓜哇製糖會社が土人の地主より其の所有地を賃借し、甘蔗栽培に當らしめる經營方法に類似してゐる。從て瓜哇製糖に於ては、工業過程が其の原料生産過程たる農業を自己の經營に綜合統一せるものである。然るに臺灣に於ては、製糖會社の原料自作の割合が少ないから、勢ひ一般甘蔗栽培者から原料たる甘蔗を購入せざるを得ない。併し臺灣に於ては、この製糖會社の原料獲得を容易ならしめるため、律令により原料採取區域が規定され、法定の區域に栽培される原料甘蔗は必ず法定の製糖會社に賣却し、栽培者は勝手に之を他の會社又は其他に賣却することを禁ぜられてゐる。さればこの規定により、各會社は原料に關する限り、地方的獨占權を確保するものと言ふことが出来る。<sup>2)</sup>而して各會社は原料品質の統一を圖る目的を以て、蔗農に對し、栽培方法、收穫順序、收穫調製法、蔗莖運搬法等を指定する。會社の原料甘蔗買收價格決定は全然一方的行爲であり、この價格決定については農民は發言權を有せない。かく會社が原料獲得に關しては地方的獨占權を有すると言ふものの、その加工品たる砂糖に就ては、關稅障壁を通じ、世界市場に於て有利なる生産條件を有

- 1) 根岸勉治氏、臺灣に於ける製糖原料甘蔗の獲得特に其の買收價格（農政と經濟）四五頁
- 2) 淺香末起氏、臺灣に於ける製糖原料の問題（經濟時報、第三卷、七號）參照

する瓜哇糖、玖瑪糖と競争せざるを得ないから、之に對する競争力を増すため、勢ひ原料價格の低下を圖り、稍もすれば此の競争の危險を原料生産者たる農民に轉嫁し易いこととなる。併しなから近年の蓬萊米の内地進出により、その價格の騰貴を齎したから、農家は甘蔗買上價格の如何によりては、より、有利となる米作に轉換することとなるから、從て製糖會社の原料獨占は決して絶對的のものではない。

五、以上は原料加工業が農業より分離し、機械化され、工場化され、大資本化された場合に於ける加工業と原料生産者たる農民との關係に就て論じたるものであるが、これ等の場合何れも加工原料たる農産物は、相當の保存力を有するものである。併し生繭の如き原料品に在つては、保存力比較的乏しきため、反つて生産者たる農民が賣り急ぎ、その結果、賣手たる工場家を利することとなる。されど原料の保存力が餘りに少なく、殆ど零に均しい場合には、假令その加工過程が既に機械化せる場合と雖も、この加工業が農業から充分完全に分離し得ず、從て大工場生産化し得ないこととなる。これは静岡縣下の製茶事業に就て見るところである。即ち同地方の製茶には既に手揉が廢れ、機械製茶となつてゐる。しかし一方この製茶機械を購入するには、相當の資本力を要する所から、貧農は之を購入して有利に生産し得ない。他方製茶機を設備したる富裕なる農家に在つても、この機械の能率を充分に發揮するには、從來の自園の茶のみを以てしては不足であるから、勢ひこの機械を購入し得ない農民から生葉を購入することとなる。茲に於て製茶と

いふ加工業と原料生葉栽培者とが分離することとなり、茲にも農業の垂直的分化を促す。併し原料たる生葉は殆んど保存に堪へないから、大量購入が不可能であり、従て工場的なる製茶工業を出現せしむるに至らない。

#### 四 結 言

以上本邦農業生産に於ける水平的及び垂直的二分化が如何なる程度に於て行はれ、如何なる方向に展開しつつあるか、またそれが農業と農民とに對し如何なる影響を及ぼしつつあるかに就て検討した。社會進化上に於ける分化過程は、やがて再び綜合統一へと復歸する傾向を有する。農業生産上に於ける水平的分化は、農業生産をして適所に適生産を實現せしめ、その結果生産は増大せられ、生産費は節約され、國民經濟全般よりすれば大なる利益を齎してゐる。併しその反面に於ては、作物栽培上に於ける推移により、一時地方的打撃を與へ、また之によつて特殊作物の過剰生産を惹起して、地方的に一時損害を與へたることは否み難い。殊にかゝる適所適生産の傾向を無視して、各府縣が凡ての農産物に就て、自給自足の生産奨勵をなすに於ては、結局全國的の生産過剰を惹起し、その地域の生産者をも困窮せしむるに至るであらう。従て農業生産上に於ける水平分化の發展傾向を認識し、全國的立場より適所適生産に向ふべく、農業生産の地域的統制を加ふると共に、殊に蔬菜の如き作物にありては各地域に於ける生産時期の調和を圖り、之

によりて季節的に起る過剰出荷を避け、また其の販賣過程に於ても、全國各都市の中央卸賣市場に對する出荷も、販賣組合の全國的聯合によつて、之を全國的に統制するやう、日本全體の農業といふ意識の下に、各府縣に於ける農業の發達を講じなければならぬ。

更に農業生産に於ける垂直的分化に就て見るも、農村産業組合の力によりて、生産の各階段を農民の手に綜合統一せんとする傾向も、多少は看取される。組合製絲、酪農組合の如き然りである。されど農業より分化せる加工業が既に大獨占資本化せる場合に於ては、原料生産者たる農民の加工組合によりて、之を農民の手に綜合統一するは、恐らく不可能であらう。併しこの場合と雖も、農民の協同的加工組合を通じて、農民の全國的團結が結成される場合に於ては、大企業の獨占方に對抗し、之を牽制することによりて、農業的原料品の合理的價格構成を期待し得る餘地が尙ほ存してゐる。大資本の未だ獨占せざる農産物の加工方面に就ては、殊に産業組合組織による加工組合によりて、垂直的分化の綜合統一を圖り、農村の工業化を圖ることは目下の急務でなければならぬ。